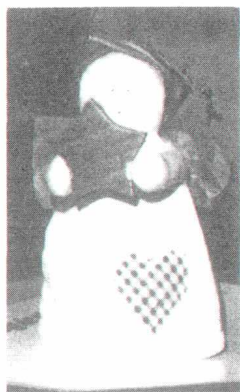


天使の羽



ツェルトナーすみ子

Sumiko Zeltner

ツェルトナーすみ子 (Sumiko Zeltner)

1948年 山梨県生まれ 山梨英和学院卒業
後、1969年 カナダ、バンクーバーに渡る。
その後、香港、シンガポール、フランクフル
ト、チューリッヒ、ロンドンに住む。1993年
から東京在住。

住所：CH-7250 Klosters, Switzerland

天使の羽

1994年 6月1日第1刷発行

著者——ツェルトナーすみ子

発行者——田村雅之

発行所——株式会社 砂子屋書房

東京都千代田区内神田3-4-7 郵便番号101

電話・東京 (03) 3256-4708

印刷所——長野印刷商工株式会社

製本所——並木製本

©Zeltner Sumiko Printed in Japan 1994

定価2000円

* 目 次

クリスマススの頃に	7
指輪	12
初めての同窓会	15
ご主人のお料理	18
着物でガウン	20
ピンポン台	22
一時間の散歩	25
誉めよう！	28
フラウ ライヘン	30
ちよっとアメリカン	32
お土産	36
立ち居振舞	38
パッチ・ワークの展示会	41
違う私	44
ぼんぱり ぼんぱり ぼん ぼん ぼん	46
スイスの家庭料理	47
チーズ好き	52

ピクニックで	54
ロステイとミュージ	56
むつつり屋さんに	59
歯並び	60
桜のお便り	63
イザベルのこと	64
お気に入りのこと	68
土曜日をお休みに……	70
サンキュウ・ディア	73
おしゃべり	75
誕生日のご招待	77
お手伝いさんで思うこと	79
チャイナペインティング	88
木陰でデイト	90
ロンドンのタクシー	92
並ぶ	94
グライインボーンで	96

七五歳のお誕生日に

平均的日本人ということ

天使の羽

ティー・ハウス、忘れな草で

香の贈り物

誤解

靴のこと

ドクタークンズ

ウィンブルドンでテニス

理想の休日

小さな マナー

子供とよつに組む

あいさつ

僕の趣味

血液型

ミヒに

イアリング

たかがテニス、されどテニス	141
頭を二針……	147
街でお茶を一杯	149
汚れたチキン	152
ゲーム・ボーイ	157
英語の先生の日本語	159
今日の日はさようなら	161
浦島太郎さん	163
むらさき	168
おじゃま電話	170
ファッション・ショー	173
神様の贈り物	175
うぬぼれ鏡	178
ベアトリス	180
布と遊ぶ	183
いちごの季節	185
バースデイのお皿	187

カリンのイグジビッション	188
朝食に	191
家にあこがれて	193
タルト・タタン	197
象さんにさわる	198
ちよっと嫌な思い出	201
T・P・O	205
ブテイクで	207
日記	209
シャムバラ・プロジェクト	211
おともだちに	214

クリスマススの頃に

一緒にすまないかと問われ、スーツ・ケース一個を抱えて、彼、現在の夫の住むシンガポールについたのは二十五歳のちょうどクリスマススの直前、今から二十年近くも昔のことです。一年間住んでいた香港での生活に終止符を打ち、男性との共同生活はまさに初めての経験です。彼と一緒に住むという喜びより、いったいこれから私の将来はどうなってゆくのかしらんという不安の気持ちのほうが強く、ひょっとして私はたいへんな間違いをしようとしているのではないかしら。そう思うと自分の決心にいつとき自信を失ってしまいそうでもありました。

それでも恋人と過ごすロマンチックなクリスマススです。胸は踊り、やはり本音はしあわせ！　というところです。クリスマスス料理なんてしたことのない私でしたが、料理の本とくびっぴきで彼をびっくりさせようと意気こんでおりますと、その日帰って来た彼はすまなさそうにいました。

僕だけがカーソナル氏のパーティーに招待された。それで君のことをいったら、君も招待したいのだけど椅子の数も足りないとおっしゃる。じゃあ失礼だけど今回僕たちは遠慮させていただくことにしたら、せめて食後のコーヒーだけでもこないかって。だから、僕たちのディナーの後、ひょっこり顔だすっていうのどうだろう。会社の若い連中みんな呼ばれているみたいなんだ。

本来はそのコーヒーもお断りすべきだったのでしょうが、私達は若くて世間知らずで、そして誰も彼も愛していました。お世辞にも上出来といえないステーキのディナーでしたが、ろうそくをともしで一応雰囲気だけはクリスマス。若い二人はそれだけで満足したあと、「さて、そろそろあの人達もコーヒーの頃、行ってみようか」。「何着ていこうかしら」。「さあ、こうちょっと立ち寄ったというのがいいのではないの？」

今思うと信じられない冗談みたいだけど、わざわざ普段着、それも散歩にでるような格好で、クリスマス・プレゼントどころか一箱のチョコレートも一本のワインも持たずに、彼の上役の家のドアをノックしたのでした。そして、そのドアの向こうには、今まで踏み入れたことのない別世界がありました。

フカフカの真っ白いカーペット、バトミントンさえできそうな広さのリビングルーム、中央には輝くシャンデリア。そしてモダンなプラスチックとガラスの家具。いた

るところに輝く金色の裝飾品。真っ白いイミテーションのクリスマス・ツリーは天井に届かんばかりの高さで、赤、黄色、ブルーの豆電気がチカチカまたたいていました。そして、そのツリーの下にはプレゼントの山。きらびやかな包み紙とリボンにふさわしい中味なのでしょう。そこにいる人達は皆、ダークスーツとイブニング・ドレスに身を包み、ゆったりと低いソファーにくつろぎ、突然の侵入者に驚いている様子でした。

慌てて玄関に駆け出してこられたアメリカ人のその夫人、ニクソン元大統領夫人にそっくりでしたが、にこやかに笑みをつくってはいるもののすっかり戸惑っておられません。

「まあよくいらっしゃったこと。私、計算違いをしてしまって、ターキー一時間前に出来上がっているはずが、まだオーブンの中なの。お客様みなお待ちしてしまっているの。さあ、どうぞお入りになって。おいで下さって嬉しいわ。」

私達はシマッタと思ったけど、時すでにおそし。その華やかな世界に足を踏み入れました。美しく化粧し、ダイヤのネックレスをし、純白のイブニング・ドレスの素敵な中国女性がニコッと笑いかけてくださいました。

「さあ皆さん、ターキーの出来上がりよ。」夫人はみごとな狐色に焼き上がった巨大なターキーを抱えて台所から姿をあらわします。急遽用意された私達の席に腰を下ろし

ます。たしかに少し窮屈かもしれないけど、座ろうと思えば座れるのだ、なんてチラツと思いましたが。ダイニング・ルームはキラキラ何もかも眩しくて豪華です。白い麻のテーブル・クロスに曇り一つなく磨かれた銀器、テーブルの中央にはランの花が盛られています。そしてアソナル氏は巨大なターキーを手慣れた様子でさばいてゆきます。

もう食べてきましたからといってもやはり、お肉一片欲しくなってしまう。こんがりと焼き上がったターキーは見るからに食欲を刺激します。「じゃあ」と言っていたいて食事の終わる頃にはすっかりいい気分です。ホワイト・クリスマスの音楽の流れるなか、繰り広げられるプレゼントの豪華さに目を丸くして感心。自分たちはなんにも持っていないことも忘れて。

このクリスマスの出来事はきつとあのご夫妻のクリスマスの歴史のなかで、ひときわ印象深く、そして何年も何年も語りぐさとなったに違いありません。

でも当の本人達は、家に帰る車の中ですっかりいい気分で、

「良かったね、みんないい人達ばかりだったね。」

「でも、ものすごくアメリカン！ なにもかもキンピカだね。」

「スイスのクリスマスはもっとナチュラルなんだ。本物のツリーをかざって、本物のキャンドルを灯す。リングをかざることもある。焼いたクッキーとか子供たちが自分

で作ったものとか。」

「来年のクリスマスはスイス？」

「そうしよう、そうしよう。」

なんてニコニコしながら語り合い、そして一週間もたつたたないうちには、すっかり忘れてしまうことでした。それほど私達は若くて、毎日毎日が新しい発見の連続で、生きているのが嬉しくて、どうしようもなくお互いに恋していました。そして、キンキラキンに輝くクリスマスのテーブルよりもっと大事なことを信じていました。いつの間にかすっかり忘れてしまっていて、ずっと思い出すこともなかったのに、今ごろ思い出したのは私達がそれだけ年をとってきたからなのでしょう。そして、あの時以上に顔のあからむ思いをするのも、また……。

指輪

息子が結婚したいと、はるかかなたの東洋の国から連れてきた女性は、ドイツ語は話せず、年齢よりずっと若く見えて、まるで女の子といった印象だったのではないでしょうか。心の中でかわいそうに息子よ、あなたも苦勞するわね、と思われたかどうか。おそらく自分の青春の時と重ねあわせてみたのではないかしら。

義母イリヤはフィンランドで生まれ育ちました。母方はドイツ系のロシア人で、ツァーの時代の裕福な商人でしたが、革命でフィンランドに逃げのびてきました。その時イリヤの母はまだ十代、たいへんな苦勞をしたとききます。そしてイリヤは鉄道技師であった父親との間に生まれた三人兄妹の末っ子として育ちましたが、やがて国を出て、スイス、ベルンのフィンランド大使館で働き、私の夫の父親と出合ったというわけです。たどってみると夫の家系の男達は、三代も外国人を妻にするという、似たようなことを繰り返しています。きっと私の息子も世界のどこからかお嫁さんを連れてきて、

私達を驚ろかすのではないかと思うのです。

私達が婚約の報告のために、イリヤに会いにスイスに行った時のことです。

夜、夫は母親のベッドに腰掛けて、私と結婚するつもりだと報告したそうです。イリヤは、言いたいことはたくさんあったのでしようけど、あなたがそれでいいのならと、祝福してくださったと、夫がずっとあとに話してくれました。

結婚式の朝、この花嫁はスイスの国で一人っぽだったものですから、自然と夫の家から人生の旅立ちをすることになりました。その朝、食事前に夫のズボンにアイロンをかけながら、なんて変な花嫁と思ったことを覚えています。

さあ朝食です。イリヤと義弟のトマスそして夫のロバートと私でテーブルにつきました。私のテーブルの上は、庭でつまれたたくさんの美しい花々で埋めつくされています。まあ嬉しいプレゼントと思って感激していますと、みんながニコニコしながら、もっと良く見てごらんというのです。白いおさらの上にちいさな紙の箱が花に埋もれるように置いてありました。ドキドキしながら開けてみますと、ダイヤの指輪がありました。ロバートが説明するように話し出しました。

「それはママがママの父親からもらったものだって。ママからのプレゼント。サイズは少しなおしたほうがいいかもしれないね。」

夫に買ってもらうのとおんなじくらいうれしかった。ああ、いいなあと感激しました。私が母になったときに、息子の花嫁に大事なものをあげられるかしらと考えました。そして、それはとてもすばらしいアイデア、わたしもそうできるような母親になりたいなと思いました。

五月十七日、結婚式の朝の思い出です。